

資料編 ③

大町市こども計画策定に向けたヒアリング結果報告書

1. 趣旨・目的

大町市こども計画策定に当たり、こどもや教育・福祉関係者に対して意見聴取を行い、こどもを取り巻く環境についての課題を整理するために実施しました。こどもに対してはグループインタビュー形式、教育・福祉関係者に対してはヒアリング形式で実施しました。

2. 実施日時

令和7年7月31日（木）

3. 意見聴取対象・時間・場所

対 象	時 間	実施場所
放課後児童クラブ（北小※1）	支援員 9：15-9：55 児 童 9：55-10：25	北小児童クラブ
放課後児童クラブ（美麻小※2）	支援員 10：50-11：30 児 童 11：30-12：00	美麻小児童クラブ
中信教育事務所 長野県スクールソーシャルワーカー	13：30-14：30	大町市役所 （オンライン）
特定非営利活動法人	15：00-16：00	市内事業所

※1 登録児童規模の大きなクラブ

※2 登録児童規模の小さなクラブ

4. 総括

意見聴取の結果として、こども計画策定に向けていくつかの重要な情報を得ました。概要は次のとおり。

(1) こどもの居場所

本市は長野県下でも面積が広く、冬季の積雪も多い豪雪地帯です。したがって、バス等の公共交通機関を利用して通学するこどもが多いのが現状です。こどもの居場所を確保するにあたって、こうした面積や気候条件は大きな課題であり、ヒアリングにおいても居場所を整備しても、近隣のこどものつどいにしかならないという指摘もありました。

現状では、児童クラブや児童センターが重要な居場所として機能しています。

児童クラブは、クラブによっては支援員が不足しており、また利用児童も多く、日によってこどもたちが自由に過ごすには十分なスペースが確保しづらいこともあります。小学校再編に伴い、児童クラブも再編されますが、当面は利用者数が減少するとは言い切れず、受入数の確保が重要な課題になります。

また、児童クラブ・児童センターいずれも小学生の利用が中心であり、中学生以上のこども・若者の居場所については、今後検討していく必要があります。

本市の地域性を考えると、公的に居場所を確保するだけでなく、学校から距離のある地区においては地域と居場所のあり方を検討する必要があります。

(2) こども同士のつながり

今回の意見聴取は小学生が対象でしたが、学校や児童クラブのほかでは、習い事やゲーム内の交流が、こども同士のつながりを育む重要な場となっています。特に聞き取りに応じたこどもはすべて何らかのゲームをしていました。

ゲーム内の交流でのトラブルが懸念されますが、こどもたちはWEB上で知らない人との交流はしていないと回答しており、基本的に現実の友だちとオンラインで遊んでいる様子でした。

昨今の報道等から、闇バイトなどに対する保護者の不安も高いと考えられ、WEB上の交流に関するリスクなど、学校や家庭での啓発をしていく必要があります。

(3) こどもの権利

こども計画の推進において、保護者やこどもに関わる職種の人だけでなく、こども自身もこどもの権利について知ることが重要です。ヒアリングでは、現状こどもの権利について学ぶ場や機会がなく、そもそも本市に浸透していないという指摘を受けました。

今後、出前講座や学校において、こどもの権利の周知・啓発に取り組む必要があります。

(4) こどもを守る体制

本市ではスクリーニング登校支援会議を開始して3年になっており、不登校をはじめとしたこどもの課題に対して、関係機関の連携による対応を進めています。SSWからは、学校現場と福祉の連携は今後一層進める必要があると、指摘がありました。

こどもを支援するために有効な多職種連携を図るためには、問題行動の対応だけを検討するのではなく、こどものできることや強みに目を向けて支援や連携のあり方を検討する必要があります。

また、こどもが学校を卒業しても支援が途切れないことも重要で、本市はキャリアサポーターなどが若者支援に取り組んでおり、その体制が整っています。

本市では、課題を抱えるこども一人ひとりの特性に目を向け、こども自身の意見表明を支援し（アドボカシー）、こどもが望む未来に向けて途切れない支援につないでいくことが重要です。

(5) 障がい児支援

こども大綱では、障がい児支援として包容（インクルージョン）を重視しており、今回のヒアリングでは障がい児の教育・保育現場への受け入れについて意見をうかがいました。

関係者からは、こどもたちにとって重要なのは公平に一律の扱いをすることではなく、こども1人ひとりが適応できる環境や、1人ひとりに合った支援を行うことであるという指摘がありました。

発達障がいのこどもによっては、学習するには静かな環境が必要なこどももいるため、教員やクラスメイトの理解や加配等の配慮が必要となります。包容（インクルージョン）を推進するためには、まずは理解ある環境を整備するための啓発が重要です。

また、保護者の育児不安や社会経験不足がこどもの課題を複雑にしているケースについても協議されることがあり、保護者へのサポートも検討する必要があります。

(6) こどもの貧困

こどもの貧困への対応は、保護者やこどもとの信頼関係が構築できていないと、支援につながぐことは難しい現状が、関係者から指摘されています。また、経済的な貧困だけでなく、人間関係が希薄で、うまく相談ができないという保護者の社会性の課題ゆえに支援につながらない貧困も指摘されています。

経済的にはある程度充足していても、たとえば車やゲーム機などは買っているのに給食費や公共料金を滞納するような、生活能力に課題のあるケースも指摘されています。

また、市内にはヤングケアラーが疑われるケースも確認されており、こどもの貧困にも様々な課題があることがわかりました。

様々な状況・課題に対しては、関係者からの指摘にもあるとおり、信頼関係の構築が重要であり、多職種連携のもとで継続的に対応を検討し、支援につなげていくことが重要です。

5. 意見聴取結果

(1) 放課後児童クラブ

対 象	
北小児童クラブ	支援員

i) こどもの日常生活に関して

① クラブ運営における問題点（こどもの生活、こども同士のトラブル等）

【現況】

- 支援員は、通常3人を配置し、夏休み期間中は2人を配置している。児童クラブの利用申し込みは100人程度からあり、毎日30～50人程度の児童が利用している。
- 体育館があり、身体を動かせる遊び場として機能している。

【困っていること】

- 具合の悪いこどもを静養させたり、トラブルがあったときにこどもがクールダウンできたりするようなスペースがないこと。現在は体調の悪いこどもがいたときは、保護者の迎えが来るまで水道の前に布団を敷き、静養してもらっている。保健室は、放課後は養護教諭がおらず、病児保育の利用も難しい。来年度に移転する新しい施設の状況は、まだ不明。こどもたちが静養できる場所を確保したい。
- こどもの人数に対し、支援員の数が少ない。支援員がこどもに個別対応しているとき、全体を俯瞰して見る別の支援員がほしいので、もう1人か2人は必要。

【近年の変化】

- 個人情報保護を強化した。他の児童クラブで、入口にこどもの名札を貼るようになっていたところ、外部から指摘を受けたという話を聞いたので、対応を変えた。かつては、名簿が出したままであったり、こどもの名前を記入した荷物札を廊下で管理したりしていたが、現在はこどもの名前が見えないように管理している。
- 以前よりもこどもの自主性に任せるようにしている。以前は、宿題が終わってから遊ぶように指導していたが、現在はある程度こども自身で判断するように促している。低学年には、支援員が声かけをしている。宿題の内容を聞いてくる子もいるが、バックヤードに辞書を置いて、自分で調べるように指導している。
- 朝の会を簡略化した。以前は、事務連絡だけで10項目くらいあったが、現在は「体調」「水筒等の持ち物」「支援員からの話」としている。

② 保護者からの要望等

- 長期休暇期間中の開所時間は8時であるが、その前から待っている人がいる。外の入口で支援員が受け入れを行っている。令和8年度以降は長期休暇期間中のみ7時半から受け入れる体制を整える予定である。また、夕方18時までとしているが、延長はしない方向。
- 塾や習い事へ児童クラブから、保護者の送迎なしで直接行かせたいという要望がある。子どもたちだけで歩かせてしまうが、児童クラブから近くにある場所については認めている。道路に飛び出さないよう、子どもたちを整列させ、玄関を出るまでは支援員が見送るようにしている。遠い場所については認めていなかったが、要望により対応することになった。
- 長期休暇期間中、子どもだけで児童クラブに通わせたいという声もあるが、原則保護者に送迎してもらっている。子どもの安全面を考えると、保護者の利便性を優先させるのは難しい。

③ 小学校・市へ望むこと

- 新校舎には、男子トイレに洋式トイレがあるといいと思う。

ii) こどもに関する問題について

① こどもからの困りごとの相談

- 直接相談を受けることはないが、会話の中で、父母の不仲や友達同士のトラブルを耳にすることもある。

② 他機関との連携の状況・問題点

- 問題行動があるこどもについては、担任の先生等から学校での様子や対応について話を聞くことがある。家庭での状況は把握していない。
- 家庭児童相談員とは連絡をとっている。

③ 地域におけるこどもの居場所

- スイミングクラブには、宿題ができるスペースがあるようである。
- 近隣に公園はなく、児童館もない。
- この辺りの地域事情として、子どもたちはスクールバスによる登下校であり、冬は雪道となる。居場所があったとしても近所に住むこどもしか来ることができない。子どもたちは習い事が多くて、忙しい。子どもたち同士の繋がりをもたせるために、習い事に通わせている印象を受ける。

対 象	
北小児童クラブ	児 童

i) 日常の居場所に関して

① 放課後、休日にどんなところすごしているか。

- ほぼ毎日児童クラブに来ている。
 - 妹と一緒に家に帰る。
 - 習い事（ダンス、習字、野球、スイミング、英語、サッカー）。
- 2～3つの習い事を掛け持ちこどもが多かった。

② どんな遊びが好きか。どんな遊び場が欲しいか。

【好きな遊び】

- レゴ。
- 人狼ゲーム。

【ほしいもの】

- ブランコ。
- 外で遊べる場。
- Mゲージ、プラレール。

③ ゲームやSNSの1日の利用時間は。ネットだけの交流があるか。保護者は知っているか。

【ゲーム・タブレット】

- マインクラフト。
- キッズタブレットを持っている。時間制限はある。

【ゲームを通じた交流】

- 知らない人と話すことはない。
- フレンドとチャットする。

ii) 悩みごとの相談について

① 悩みがあるときは誰に相談しているか

- 親・先生に相談する。
- そもそも喧嘩をそんなにしない。

② 先生やSSWに相談はするか。しない場合、その理由は。

- 専門の先生と話したことがある。誰と仲がいいかを聞かれた程度の会話だった。
- みんな仲がいいから相談することはない。

対 象	
美麻児童クラブ	支援員

i) こどもの日常生活に関して

① クラブ運営における問題点（こどもの生活、こども同士のトラブル等）

【現況】

- 美麻小は小規模地域特認校であり、大町市街地から通学しているこどもたちと、近くに住んでいるこどもたちが混在している。
- 支援員は2人、代替支援員は4人。夏休み期間中は午前午後2人ずつ配置している。
- 長期休暇期間中は、朝の会、昼ご飯、おやつ、掃除等の活動を行っている。掃除はこどもたちが協力的で、頑張って取り組んでいる。
- 隣接する公民館で行事（ブルーベリー、いわたのつかみ取り等）があり、希望者は参加している。
- 宿題は、クラブに来てまず終わらせることをルールにしている。通常時は15:45まで、長期休業期間中は9:30までは、宿題等を行う静かな時間として設定している。

【困っていること】

- 人数に対してのスペースはあるが、体育館がない。運動は公民館の講堂を借り、ソフトボールでドッジボールを行ったり、建物の周りを走ったりするくらいで運動不足になりがち。
- もとは美麻村の情報センターだった施設を使っている。雪が降るため、冬は寒く、ホットカーペットや床暖房で暖をとる一方、夏は暑い。
- お弁当はきちんとしたものを持ってこどもが多い。朝食は、保護者が準備しないというよりも、朝食を準備してもこどもが食べなかったという話を聞く。

② 保護者からの要望等

- 市街地から通っているこどもについて、平日のお迎え時間が遅くなるので、おやつを持たせたいという相談があった。美麻児童クラブ単独では対応できなくもないが、対応できない児童クラブもあるので許可できなかった。ただ、地域の人がおにぎりやおやつ等差し入れをしてくれるので、それをおやつとしていただくことはある。
- 開所時間外の受け入れは、本年度は希望者がいなかったが、希望者がいる年もある。
- 市街地から通学するこどもは、通常、市バスに乗ってくる。しかし、児童クラブを利用する場合は保護者の送迎を必須としている。市街地から市バスに乗せたいという希望もあるが、乗り過ごし等の可能性もあり、安全面から受け入れていない。

ii) こどもに関する問題について

① こどもからの困りごとの相談

- 「いやな言葉」がトラブルにつながりやすい。
- こどもが仲間に入っていくことができず、孤独を感じているような瞬間がある。その際は、共遊
びや集中できる遊び（機織り等）を提案し、楽しく過ごせるように促している。

② 多機関との連携の状況・問題点

- 学校との連携はとることができている。放課後、1・2年生は先生が児童クラブまで見送って
くれる。小学校で怪我をした場合は養護教諭から連絡が来る。支援員と保護者とは送迎時に直接会
うことができるので意志の伝達ができる。

③ 地域におけるこどもの居場所

- 放課後のこどもの居場所としては、徒歩圏内にある「近所の家」が遊び場となっている。
- 美麻の集落は点在しているので、サードプレイスができて集まることは難しい。
- ゲームは、家ではやっているようである。朝、児童クラブに来て、「家でゲームをやりたいか
った」と不満を言っているこどももいるが、友達と遊んでいるうちにその気持ちを忘れるようである。
また、帰りに一緒にオンラインゲームの約束をしている光景を見かける。22:00 くらいまでゲー
ムやっているこどももいるようである。

対 象	
美麻児童クラブ	児 童

i) 日常の居場所に関して

① 放課後、休日にどんなところすごしているか。

- 児童クラブ。毎日来ているこどもも、来ていないこどももいる。

② どんな遊びが好きか。どんな遊び場

【好きな遊び】

- 絵を描く、塗り絵。
- 人形遊び。
- 卓球。
- 読書（漫画含む）。
- 外遊び（鬼ごっこ、プール）。
- 運動したいときは講堂。外は暑くて遊ぶことができない。

【ほしいもの】

- Nintendo switch2。
- 屋内プール。
- 広い遊び場、体育館（暑くても遊べるバトミントン等）。
- 児童クラブで犬を飼いたい。

③ ゲームやSNSの1日の利用時間は。ネットだけの交流があるか。保護者は知っているか。

【ゲーム・タブレット】

- あつまれどうぶつの森、人生ゲーム、にゃんこ大戦争、マリオカート。

【ゲームを通じた交流】

- 知らない人と話すことはない。
- 任天堂オンラインはやっていない。ローカル通信のみ。友達とは交流する。

ii) 悩みごとの相談について

① 悩みがあるときは誰に相談しているか

- 親に相談する。

② 先生やSSWに相談はするか。しない場合、その理由は。

- 話したことはある。

(2) スクールソーシャルワーカー

対 象	
中信教育事務所	長野県スクールソーシャルワーカー

i) 現在の業務の中で、どのような課題と関わることが多いですか。また、関わるきっかけや、どのような支援を行っているか、教えてください。

- 関わるきっかけは、学校からの依頼。対象となるのは、不登校、いじめ、暴力行為、非行、友人関係、教職員との関係、児童虐待、ヤングケアラー、発達障がい、性的マイノリティ、家庭環境等。ケースとして、不登校、心身の不調、発達障がい、家庭不和等が複合していることが多い。
- 学校に訪問し、教職員等から話を聞いてアセスメントを行う。直接支援としては、保護者面談、生徒との関わりにより、次のステップにつなぐ対応を行う。間接的な支援としては、教職員と連携し、適切な支援機関（フリースクール等）につなげる等の対応を検討する。
- 一昨年から学校でスクリーニング会議（年4回）を実施し、気になる生徒の情報を共有している。
- 性的マイノリティについては、大町市内で事例はない。
- 基本的な支援のスタンスは、保護者と学校の間に入って支援を行う。

ii) 学校や教員との連携において、課題と感ずることがあれば教えてください。

- 学校へ定期的に訪問することはないが、学校教育課から連絡をいただいている。SSWという職種は特別支援コーディネーター等とはよく関わるが、担任の先生とは放課後の時間等もなかなか会えず直接の関わりはまだ薄い部分がある。
- こどもの課題へのアプローチは、教職員は問題行動に対応する視点で考えるので目標が高くなりがちである。一方、SSWは福祉的支援として、こどものできることや強みに目を向けて考えるので、この違いをどのようにすり合わせていくかが課題である。
- スクリーニング登校支援会議を始めてから3年目となる。福祉部門との連携もとれて定着してきているが、教員との連携はまだ機能しきれていない面がある。
- 支援会議は、困ったことにどう対応するかというスタンスになっている。「できることは何か」「どんな役割ができるか」という視点で協議すれば、もっと円滑に進むのではないかと考えている。
- 長野県全体で、特別支援学級に在籍する児童が増えている。特別支援学級の知識がある教員、そうではない教員の差がある。先生方の研修が追い付いていないと感ずることがある。
- 大町市は、専門職、居場所を提供する事業者も参加している。コンパクトでチームが作りやすい、情報共有がしやすい自治体だと思う。
- SSWの支援対象は基本的に小・中学生であるが、公立高校から依頼が来るケースもある。基本的には在学中の支援をして、卒業後の支援をしてくれるところにつないでいる。
- 「切れない支援」に努めており、必要な場合は伴走的支援につなげている。大町市は私立学校在籍者等向けにキャリアサポーターの制度があり、つなぎやすい体制が整っている。

iii) 現在の業務の中で、発達障がいやインクルーシブ教育に関して、課題と感ずることがあれば教えてください。また、直面した事例について、可能な範囲で詳しく教えてください。

- 学校と保護者の発達障がいに対する理解の差を感ずる。保護者は、専門教育を少人数で受けるものだという認識がある。インクルーシブには、周囲の刺激が受け止めきれないこどもに対する合理的配慮が重要。
- 通常学級には 30~35 人いるので、母集団が大きく、担任の先生も対応に苦慮している状況が課題。
- 高校進学後、グループワーク等ができなくて挫折してしまうこどももいる。
- 県外から転校してきた保護者から、長野県は特別支援学級に入ることができ、手厚くみてくれるという声もあるが、一方で差別的な視点を感ずているというこどももいる。
- 個別最適な教育が重要だが、自閉症・情緒障害特別支援学級の取組は市町村ごとに差がある。

iv) 現在の業務の中で、こどもの貧困に関して、課題と感ずることがあれば教えてください。また、直面した事例について、可能な範囲で詳しく教えてください。

- 大町市でもヤングケアラーの疑いがあるケースはあった。
- 貧困の問題はデリケートで、保護者や生徒との信頼関係性が構築できていないと、なかなか支援につなぐことは難しい。関係性ができてはじめて、色々な話が出てくる。人間関係が希薄で相談下手な人には支援が届かないので、社会性の貧困も課題である。こども同士でも、自分の家の経済状況が気になる。
- 衣食住に困るような貧困というよりも、例えば、家にゲーム機はあるが、給食費や水道代を滞納してしまうような、生活能力の欠如による貧困もある。
- 行政の専門職とチームで支援していく。アウトリーチには専門職が対応した方が効果的。

v) 現在の業務の中で、いじめや不登校への対応に関して、課題と感ずることがあれば教えてください。また、直面した事例について、可能な範囲で詳しく教えてください。

- いじめに関して、学校と家庭の間に入ったことがある。学校は対応が終わっているという判断をしていたが、こどもはトラウマで不登校になっていた。
- S S Wは、こどもが学校に在籍している間にしか支援できない。途切れない支援は意識していきたい。幸い、大町市はキャリアサポーターなどの職種の努力もあり、つながりやすい環境にある。

vi) 大町市として、こどもの権利が尊重され、こどもがひとしく健やかに成長できる学校環境のためにできることについて、お考えがあれば教えてください。

- 「こどもの権利」については学ぶ機会が少なく、浸透していないと思う。市が出前講座を実施したり、こどもの意思表示の機会があったりするといいと思う。
- 色々な立場のこどもたちの意見を聞いてほしいと思う。
- チェックリストがあれば、S S Wが聞いたりできると思う。

(3) 特定非営利活動法人

対 象
特定非営利活動法人

i) 現在の業務の中で、発達障がいやインクルーシブ教育に関して、現状の市内の状況で、課題と
感じるものがあれば教えてください。

- 「平等」とは、みんな違うから「平等」があると考えている。休み時間に一緒に遊ぶくらいは問題ないと思うが、学習となると静かな環境が必要となるので、教員やクラスメイトのこどもたちの理解や加配等の配慮が必要。一律公平に扱うではなく、そのこどもが適応できる環境や、一人ひとりに合った支援が必要。
- 児童発達支援を利用する保護者には、「保育園から行けと言われた」と問題を感じていない方もいる。専門職と話しながら理解していく保護者もいるが、途中で辞めてしまう保護者もいる。そのまま小学生となり、放課後児童クラブでは対応しきれず、放課後等デイサービスで改めて受け入れるケースもある。
- 児童発達支援を利用しているこどもに関して、進学時にモニタリング・情報伝達するが、小学校の担任にまで伝わっていないことがある。きちんとつないでくれる先生もいるが、リセットされてしまうこともあり、確実に伝達される仕組みが必要。
- 子育て支援課との連携はとれていると思う。
- 他市町村と比べると放課後児童等デイサービスが認知されていると思う。

ii) 市内のこどもの居場所の現状について、感じるものがあれば教えてください。

- 児童センターの利用は未就学児がほとんどで、小学生ほとんど行かないようである。
- 長期休暇期間中、時間を限定してゲームOKにしている。家ではゲームを際限なくやってしまうので、決められた時間の中で実施している。
- 一人ひとりのこどもに合った支援を心掛けている。宿題と自由時間のメリハリをつけたり、色々な行事を取り入れたり、こどもたちが満足できる環境づくりに努めている。

iii) 一人ひとりのこどもたちの将来のために、私たち（地域の大人や行政）のできること・すべきことについて、お考えを教えてください。

- 「自立支援協議会」における地域課題として、両親へのサポートが必要という話が出てくる。両親の社会的な経験不足から、育ちにくさを感じているこどもがいる。保護者自身、生活リズムが乱れていたり、家事ができなかったり、こどもの将来に興味がなかったりする。育児や社会を学んだり、そうした問題に気づくことができたり、地域で大人を育てるような取組があるといい。例えば、困難を抱える家族が共同生活できるような場所があってもいいのではないかと。